

みの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

多治見市
モザイクタイル
ミュージアム

特別展

まちかどの 近代建築写真展 ～タイルに出会う旅～

開催中!

写真館や美容院に銭湯……。

今回の特別展はタイルが使われた身近な建物に注目。
全国各地の近代建築を取り上げた展示内容とともに、
10月6日(土)の町歩きツアー、
7日(日)のギャラリートークの様子を紹介する。

関連イベントの企画もした岡崎紀子さん(まちかどの近代建築写真展実行委員会)。「写真は人通りの少ない朝一番で撮ります」。
(撮影:前村敏彰さん)



まちに長い間佇んでいる建物。有名な建築家が建てたわけではないけれど、個性的な造形や細部の装飾につい引き寄せられてしまう。展示室はそんな「まちかどの近代建築」たちでにぎわった。

今回の特別展は、近代建築を愛する有志が全国で展開する「まちかどの近代建築写真展」と、ミュージアムの共同企画。タイルともなじみ深い、身近な「商店建築」をテーマとした。

3階の展示室に入っすぐの空間には、タイルが使われた建物の写真とともに、ミュージアムが所蔵するタイルのサンプルを展示。建物の所在地は、山梨県、秋田県、鹿児島県…と多岐にわたり、ここ笠原町で作られたタイルが全国各地に出荷されていたことを改めて実感する。



建物の所在地を熱心にメモする人も。天井から吊り下がるのは、旧観慶丸商店の上棟式の様子や往時の写真。

写真のタイルに対応する昭和30～40年代のサンプルを展示。今にない色合いや様々な形に目を奪われる。



タイル店舗の写真はすべて岡崎さんが撮影。写真一枚一枚にコメントが添えられている。



また、タイルの名建築として知られる、旧観慶丸商店(宮城県石巻市)を大きく取り上げたコーナーも(3ページに関連トークの様子を紹介)。

奥のギャラリースペースでは、壁全面に北海道から九州までの全国各地の商店建築の写真250点を展示。個性豊かな表情をもつ建物たちに、旅心をかきたてられる内容となっている。展示期間は2019年1月20日まで。

近代建築:幕末から昭和にかけて建てられた建築の総称。
洋館や看板建築のほかには和風建築も含む。

たじみ・近代建築めぐり

特別展開催初日に開催された町歩きツアーでは岡崎紀子さん（まちかどの近代建築写真展実行委員会）と、名古屋スリパチ学会の3人の方の案内のもと、笠原～滝呂町界隈を歩いた。日差しが降りそそいだ後、雨に見舞われるという不安定な天気ながらも、歩き尽くした3時間をダイジェストで紹介。

10.6
開催

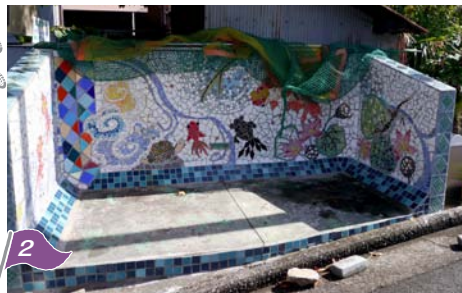
名古屋スリパチ学会とは

2014年に結成。名古屋の歴史文化、風俗、建築、アート、食を地形から読み解くフィールドワークを実施。

案内人(名古屋スリパチ学会)



1 笠原陶磁器工業協同組合(昭和38年)。上部に作業風景を描いたモザイク画。



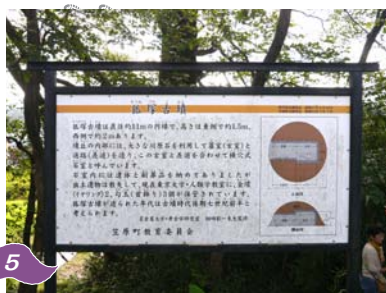
2 モザイクタイルで飾られたごみステーション。



3 かつて銭湯に使われていた、れんが造の煙突。



6 昭和3年～53年まで笠原には鉄道が運行。跡地は遊歩道となり、壁面にはモザイクタイル画が。



5 狐塚古墳(7世紀後半)。かつてこの地方の中心地は笠原だった？



4 笠原神明宮にある山内逸三作のレリーフ(昭和46年)。



7 滝呂町の川沿いの風景。多治見駅からミュージアムへ向かうバスの車窓から見て、心惹かれていた。



8 「山愛窯」の洋館。



9 元銭湯の腰壁を飾るモザイクタイル。

今回の町歩きは、ミュージアムから出発し多治見方面へ滝呂町まで歩くという少々マニアックな(?)コース。タイルの産地らしい風景や、昔ながらの町並みを楽しんだり、地域の歴史を伝える場所で往時に想像をめぐらせたりと、盛りだくさんの内容。

製陶所が多くある滝呂町は、平地の笠原町とは異なり山間の集落。川沿いの道の一画で、杉田さんは工場が並ぶ昭和35年の写真を掲げ、地域の形状を「葉の形」に例えて解説。「この笠原川をセンターにし、山側

に向かって道が葉脈のように広がり、その先に製陶所が存在しています。だから煙を出しても大丈夫なんです。地形と産業のつながりに興味深く聞き入った。

最後に見学したのは元銭湯の建物。静かな住宅街の路地に、華やかにデザインされたタイルが際立ち、思わずどきっとさせられた。

たっぷり3時間の町歩きは、ミュージアムだけにとどまらない地域の魅力を伝えるものとなった。

津波に耐えたタイルの館

—宮城県石巻市・旧観慶丸商店—

10.7
開催



3階のかつてバルコニーだった場所にあるレリーフ。

観慶丸とは船の名で、円窓は船のモチーフを想像させる。築88年になるがタイルの輝きは色褪せない。

(撮影：岡崎紀子さん)



津村泰範さん(右上)

文化財建築の保存・修復を手がける設計事務所にて、旧観慶丸商店の保存修復の設計監理を担当。現在、長岡造形大学准教授。

勝邦義さん(左下)

震災後、石巻市に移り住み、コミュニティづくりに尽力。理事として携わるISHINOMAKI2.0が旧観慶丸商店の運営管理を行う。建築家。

(撮影：前村敏彰さん)

旧観慶丸商店は、石巻市初の百貨店として昭和初期に開店し、後に陶器店として営業。東日本大震災で多大な被害に遭いながらも保存・修復され、現在は展示や市民活動などに利用されている。再生にまつわる秘話や、現在の様子が語られた。

「解体か？」から保存修復へ

トークはミュージアムの隣にある笠原中央公民館で開催された。旧観慶丸商店の調査や修復に携わった方々も参加し、会場はなごやかな雰囲気。

最初に津村さんから、市から調査の委託を受けた旧観慶丸商店が残されるまでの経緯が語られた。

東日本大震災で、旧観慶丸商店は一階が水没、正面の建具が流されるなど、大きな被害を受けた。「文化財に登録も指定もされてない、後に解体されても仕方がないくらいの状況でした」と振り返る。「道路拡張のため撤去」という話も出ていたという。勝さんたちが建物のライトアップをするなど、保存の機運が高まっていくなか、所有者から市へ無償での譲渡が決定。保存・修復の流れとなり、震災から2年を経た頃、建物の調査が開始された。当時、中に入った津村さんの印象は「外装だけでなく、内装も独特でした。陶片でつくったピラミッドとラクダのレリーフ。独特なタイルがたくさん使われていました」

棟札から昭和4年に着工、翌年5年の竣工と判明。往時の写真や周囲の住人の話から、建築当初の姿を探りつつ、保存計画を立案。市の文化財となり、建築基準法の規定が一部除外され、タイル張りの外装や、この建物の特徴である広い内部空間に影響の少ない補強方法が採用できた。こうして建物の魅力を損なわない再生が実現した。

文化を発信する場所に

勝さんは旧観慶丸商店の現況を報告。市より管理の委託を受けるISHINOMAKI2.0は、一階部分の文化交

流スペースの貸し出しや自主企画のイベントを行う。「運営スタッフの募集では、石巻の若い世代やアーティストが関心をもってくれました」。高校生によるファッションショーなど様々な催しが行われる中、最近人気だったのが、地元の女性が趣味の編み物や書を展示した「三婆展」。「地元の人にいろいろな才能があることがわかり、発見が多い展示でした」と振り返る。「観慶丸商店は石巻の最初の百貨店といわれます。いまは商品を売らないですが、変わらず文化を発信する場所でありたい。もっと自由に、実験的なことができないかと思っています」と抱負を語った。

笠原のタイルが使われた？

トーク終了後はミュージアムに移動。展示会場では、ミュージアムの設計者でもある建築史家・藤森照信さんが旧観慶丸商店について綴った文章を紹介。観慶丸とは船の名。建て主の先代は廻船問屋で、帰路の船にバラスト代わりに陶器やタイルを積み、売りさばいた経験から、焼き物を扱う問屋業兼小売業を起こし、成功したという。

資料としては旧観慶丸商店の鬼瓦や棟札のほか、扱っていた在庫の食器を展示。これが戦中に土岐、瑞浪、瀬戸などで作られたものと判明し、旧観慶丸商店のタイルもこの地域のものを含む可能性が示唆される。今後解明されることを期待したい。



笠原の施釉モザイクタイルの始祖・山内逸三が製作したタイル。旧観慶丸商店で使われたものと似ている。

バラスト：船を安定させるために積む重量物。

名古屋モザイク工業 DESIGN AWARD 2018 表彰式開催！

岐阜県多治見市の総合タイルメーカー・名古屋モザイク工業(株)は、タイルを使用した施工事例を募集し、コンテストを開催。第3回となる今回は、応募総数282件(非住宅部門95件、住宅部門187件)。一次審査でそれぞれ46件、118件が選出され、審査員により金賞・銀賞・銅賞・入賞が選ばれた。10月11日(木)には東京ショールーム(渋谷区代々木)にて表彰式が開催された。金賞～銅賞までの受賞作品を紹介するとともに、表彰式の様子をレポートする。



非住宅部門・金賞を受賞した
株式会社イリア・川崎かさね氏。



撮影：ナカサ&パートナーズ

「ホテルレオパレス 札幌」

株式会社イリア

テーマ：北海道の自然



設計者コメント

本件は、雪や氷、色鮮やかな北海道の四季をモチーフに、ゲストが「北海道に来た感」を思う存分味わえるホテルを目指し、改修をしたホテルの中の大浴場です。男女の各大浴場では、秋冬を感じさせる白樺の森、一気に色鮮やかになる春夏をそれぞれの浴室でモザイクタイルを用い展開しました。



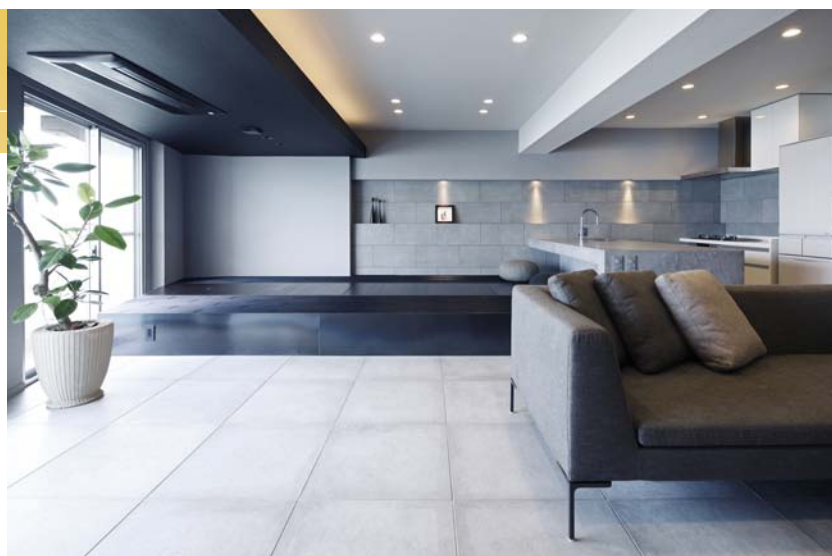
「逗子の セカンドハウス」

株式会社クラフト

テーマ：
友人たちとホームパーティで集う
クールモダンなワンルーム空間

設計者コメント

逗子の海を臨む築40年弱のマンションをリフォームした。マテリアルはモノトーンの濃淡でグラデーションをつけクールモダンにまとめつつも、ピュアモリスのボタニカル柄のクロスの一部に貼ったり、掘こたつ部分にアンティーク調の板材を使ったりしてクールになりすぎないように配慮した。





撮影:太田拓実

「パパブブレ ルミネエスト 新宿店」

トラフ建築設計事務所

テーマ:大きな看板のように人目を引く、
壁画のある店舗



「T様邸」

積水ハウス株式会社 福岡支店
竹尾洋子(指定インテリアコーディネーター)

テーマ:海外リゾートスタイル



撮影:藤井伸一郎



「Ode」(フレンチレストラン)

株式会社TYRANT

テーマ:濃淡異なるグレーによる水墨画のような空間



「よし子さんの家」

青木設計事務所 青木良介

テーマ:タイルの風



「HIBIYA FOOD HALL」

株式会社リックデザイン

テーマ:NY STYLE COMPLEX DESIGN
~CLASSIC AND MODERN~



「タイルで時代の空気を表現する」 ～表彰式から

表彰式では、最初に名古屋モザイク工業・相澤昭郎営業推進室室長が挨拶。

「デザインアワードは今年で3回目となります。世界的にはタイルは一般的な素材ですが、日本では需要が減っています。日本ではタイルは外壁、トイレや浴室、ダイニングで使用するイメージが強いですが、受賞作品の多くは内装タイルです。タイルの新しい使い方をみなさんに見ていただければと思います」

審査員紹介の後、受賞者への表彰がされた。受賞者は、受賞の喜び、設計時の苦労や施主とのエピソードを語った。続いて審査員よりコメントが述べられた。



■米谷ひろし氏 (インテリアデザイナー)

「空間デザインでは、今はセラミックタイルの時代だと思っています。住宅部門の金賞の作品もそうですが、大判タイルはよく床材に使われています。本物の大理石や御影石にないやわらかさがあり、また、セラミックは食器でも使われていて、人に近い、温かみのある素材という感じがしています。」

非住宅部門の金賞のお風呂のモザイクは、費用も職人の手間暇も十分にかけた、まさにモザイクタイルの真骨頂ですね。銭湯の富士山ではなくデザインも新しい。女性がすごく喜びそうです。

我々も刺激を受ける作品が選ばれたと思います」

■塩田健一氏 (月刊『商店建築』編集長)

「毎月雑誌をつくる中で、時代の求める雰囲気をうまく形にしているものに出会うとよい空間だと感じます。今はどういう時代なのか、キーワードが2つあります。」

まず一つ目。物を買うときにお店や商品をめざすのではなく、「楽しい場所に行く」という消費行動のスタイルに変わっていると感じます。たとえば、飲食ではフードホール。複数の店舗が入り、情報量が多くにぎやかな空間です。こういう場所はモザイクタイルと相性がよい。「HIBIYA FOOD HALL」が銅賞を受賞、「アトレ川崎」が入賞しました。

二つ目。今求められている空間デザインを表す言葉に「Virtuous（ヴァーチャス）」があります。正直、素

非住宅部門・金賞を受賞した株式会社クラフト・鹿討桂氏。



直、嘘のない感じ。タイルは「ヴァーチャス」に相性がいいと改めて思いました。タイルは厚みがあって、嘘がない感じがする。壁紙やペイントは、はがれたら下地が出てきてしまう。時代に合った空間の中で、タイルの特性をうまく引き出す使い方に、来年も出会えたらいいなと思っています」



■アストリッド・クライン氏 (建築家)

「タイルはサイズもカラーもたくさんあって、無限の可能性があります。大昔からモザイクはアートに使われていました。ホテルレオパレスのモザイク画は素晴らしいですね。ほしいものが容易に手に入る時代ですが、手に入りにくいのは経験や感動。そういうものを得られる雰囲気をつくるのが大事で、モザイクタイルではそれができると思います。一方、モノトーンの大判タイルは、静かにエレガントに、空間の中にとけていく。ニュートラルな感じでリラックスできます。」

表彰式の前には、カラーの目地材があると聞きました。そういうものを使っても面白い作品ができそうです。世の中にはつまらないタイルの使い方も多くて、もうちょっとがんばってほしいと思います。私もがんばります」

最後に早田辰比呂社長が締めめの言葉を述べた。「受賞者の方の生の声を聞かせていただきまして、タイルは素晴らしい建材だと再確認できました。今後も息の続く限り、デザインアワードを続けていきます。『タイルをアートに!!』をキーワードに今後もがんばってまいります。まことにありがとうございました」



最後に早田辰比呂社長が締めめの言葉を述べた。「受賞者の方の生の声を聞かせていただきまして、タイルは素晴らしい建材だと再確認できました。今後も息の続く限り、デザインアワードを続けていきます。『タイルをアートに!!』をキーワードに今後もがんばってまいります。まことにありがとうございました」



表彰式の終了後、受賞者と審査員、早田社長で記念撮影。